

### その三 桂洞（ゲドン）

庭の木々が青々と葉を付けている。キム・ソンス（金性洙）は、総督府林業試験場の浅川巧からもらった樹木をながめていた。庭に降りてみた。こんな気分になったのは何年ぶりだろう。

早稲田大学を卒業して朝鮮に戻ったのが八年前。帰国後すぐに、日本で温めた夢、学校経営に乗り出した。破産寸前の中央学校を買収し、朝鮮の未来を担う人材づくりを行うのだ。

無論、大学を卒業したばかりの者が学校経営を始めるなどは尋常ではない。ソンスには養父が付いていた。養父は大地主で、ソンスが可愛くてたまらない。その昔、日本に静かなる抵抗をするため私学経営に関与したこともある。危ういソンスの計画にも理解を示した。

同じく大地主の実父の方は当初厳しかった

が、日本支配に負けまいと頑張る息子が誇らしくもあり、ソンスが断食を始めると、考えを改めた。

兄も私も大地主であるが、これに安住しているわけではない。コメの積出港、群山（グンサン）への出荷ルートを整備するなど、一族の活性化を模索してきた。ここで、ソンスに最小限の金を与えて苦勞させるのも悪くはない。一族の新たな道につながるかもしれない。

ソンスは学校運営のため日本留学時代の友人を集めた。ソンスの竹馬の友、ソン・ジヌ（宋鎮禹）は、日韓併合が起こると日本留学を放り投げ、帰国して救国運動に参加したが、やがて明治大学に復学・卒業後、中央学校に合流した。間もなくジヌは校長になった。

その頃、ヨーロッパの大戦後の講和会議では、アメリカ合衆国のウィルソン大統領が民族自決の原則を提唱し、朝鮮でも自治や独立を求める声が急激に大きくなっていった。

米国に亡命中の李承晩（イ・スンマン）や上海の臨時政府などから密使が潜入し、京城や朝鮮各地で謀議が行われた。ついに一九一九年三月一日、朝鮮宗教界の主なメンバーが京城に集まり独立宣言を行った。近くのタプコル公園では学生が宣言を読み上げ、市民が加わり示威行進を行った。これが朝鮮各地に波及し騒乱に発展した。

ジヌは、中央学校の宿直室やソンス宅で密使や宗教界の人たちと会合を行ってきたが、独立宣言予定日の一か月前、暗い顔でソンスに言った。

『この動きは色々な意味で危なくなつた。結集するのは宗教界と学生だけだ。その宗教界の連携も十分ではない。

ソンス、お前は捕まるわけにはいかない。金一族の後継者だ。おれの学費を出してくれたお前の親父たちに面目が立たない。お前には朝鮮の産業をつくる役割もある。この運動からしばらく離れろ。できればすぐ

にでも故郷に帰れ。』

事件発生後、独立宣言の発起人ではないジヌらも次々と逮捕された。警察署に出頭した発起人らが謀議に関与した者を簡単に自白したのだ。故郷に帰っていたソンスは逮捕を免れた。ジヌが罪を一身に引き受けた。

その後、事件は、思わぬ方向に動いた。

日韓併合後十年近く経過したにもかかわらず大規模な騒乱が発生したことに日本政府は衝撃を受けた。陸軍出身の総督を更迭し、政治・経済・文化・教育などにおいて朝鮮人との融和を図る「文化政治」の方針に転換した。また騒乱に対する罪状は、重罪の内乱罪などではなく、保安法や出版法違反などの軽罪とした。

ジヌは一年にわたる拘留を解かれたが、獄中生活の後遺症はあまりに大きく、故郷に戻り静養するしかなかった。

『ソンスや。少しは反省をしたか。あの時、何故に急に故郷に帰って来たのかと思って

いたが。軽率に独立運動に加担したことで、危うく大切な友人を失うところだったのだぞ。朝鮮が自治や独立を簡単に勝ち得るなら、我ら兄弟も苦勞はしていない。まずは教育、産業、文化を鍛え、民族の実力を蓄えるのだ。苦しく長い道のりを耐えなくてはならないのだよ。』

養父の言葉に、ソンスはじっと唇を噛みしめた。

ソンスは、ジヌと約束した事業に着手した。日本に留学して紡績を学んだ友人のイ・ガンヒョン（李康賢）とともに大規模な紡績会社を立ち上げるのだ。

企業経営には素人のソンスであったが、予想外にスムーズに進展した。相談に行く先々で、綿布の販売ルートを握っている者、日本の商社と取引がある者、政財界の大物などが協力を承諾した。

三・一運動勃発から半年、朝鮮政財界で名

高いパク・ヨンホ（朴泳孝）を社長に迎え、京城紡績（京紡）の創立総会が行われ、同時に総督府が認可を出した。

『会社はできました。次は工場です。紡績業の根幹とも言うべき綿糸製造は技術的に難しいです。まず綿布工場から取り組みましよう。綿糸の確保と世界水準の豊田織機を購入するために日本に行かなくてはなりません。』

ソンスは、イ・ガンヒョンに会社のほとんどの現金を持たせた。

イ・ガンヒョンは、綿糸確保のほか、元手を少しでも増やそうと大阪三品取引所で投資すると、瞬く間に購入資金までを失った。

『イ・ガンヒョンは首だ！』

取締役会の大勢だった。ソンスは立ち上がった。

『落ち着いて下さい。確かに彼にも責任はありますが、自分のために無理な投資をしたわけではありません。また、彼の専門知識

なしでは朝鮮民族の紡績会社はできません。

なにとぞ今度ばかりはお許しを。』

『失った資金はどうするのだ！』

『私が何とかいたします。』

養父はソンスにかなりの土地権利証を手渡した。ソンスはこれを担保に銀行から資金を借り入れた。

再び会社は動き始めたが、朝鮮市場は日本の綿製品に席卷されている。京紡はまだ日本製品に勝る品質の綿布を作ることができない。しかも技術だけではない。原料や販路の確保など京紡の課題は山積している。生産するほどに赤字が増え、資金不足に苦しんだ。ソンスには明るい前途がなかなか見えなかった。

文化政治は、ソンスにさらに別の試練をも与えた。朝鮮人は、三・一運動では全国の状況を正確に把握することができなかつた。朝鮮民族に正しい情報を与える言論の場が必要だと誰もが考え始めた。その時、文化政治は

朝鮮人の新聞社設立に再び追い風となった。

京紡設立が一段落すると、すぐにソンスは走り始めた。京紡設立からわずか三ヶ月後の一九二〇年一月に東亜日報が認可された。

朝鮮民衆の言論機関として民主主義を支持し、文化主義を提唱することを社是とし、社長は京紡と同じパク・ヨンホ。全国に支局を置くなど形の上では本格的な体制で船出した。

東亜日報はすぐに脆弱さを露呈した。資金が乏しく、社屋は中央学校廃校舎（花洞）にするしかなかった。担当者は言った。

『発起人からの資金の集まりが極めて悪い状況です。また輪転機の手配も遅れました。創刊号は一ヶ月ばかり遅らすほかありません。』

東亜日報と同時に認可となった朝鮮日報は、予定通り創刊するという。ソンスは耐えるしかなかった。

丁度その頃、京城新聞の前社長、阿部充家（あべ・みついえ）から呼び出しを受けた。編集責任者のチャン・ドクス（張徳秀）とと



もに。

『金君に張君、創刊号発行前の忙しいときに申し訳ない。なかなか新聞発行も大変だろう。張君には昨年末に日本に行ってもらったが、呂運亨氏の通訳でよく頑張ってくれた。いつも言っていることだが、朝鮮の自治獲得のためには、君たちの責務は実に大きい。』

いやいや、今日はその話ではない。ちょっと相談があつてな。

朝鮮の美術や文化に大変興味を持っている日本人がいる。柳宗悦（やなぎ・むねよし）という者だが、昨年来の騒擾などで朝鮮人の傷んだ心を少しでも癒したいと考え、朝鮮で音楽会を開催したいと考えている。柳の妻は、東京音楽学校（現東京芸術大学）の卒業した声楽家だ。君たちは、その音楽会開催に協力してやってほしいのだよ。

斎藤閣下は、柳の父が上司だったこともあり、できるだけ協力したい意向だ。斎藤

閣下だけでなく、水野政務総監はじめ総督府の重鎮は音楽会などが文化政治に必要と判断している。

これは君たちにとっても損な話ではない。柳の妹の夫は今村武志というが、総督府専売局の中軸だ。専売局は朝鮮総督府の収入源となっている部署であることは知っているね。つまり総督府の屋台骨だ。君たちが協力は、総督府のお歴々の耳に届くことになる。

柳の京城の事務局の連絡先は、この紙に書いてある。一度会って見てくれ。私も東亜日報に色々と協力させていただくよ。』

紙切れには、『総督府林業試験場、浅川巧』と記されていた。

チャン・ドクスが言った。

『我が社の記者の廉（ヨム）という者が柳宗悦氏と知り合いでして、既に彼を通じて当社に新聞掲載の依頼が来ておりました。阿部先生から特にお言葉をいただきましたの

で、しっかりと対応させていただきます。』

ソンスは、阿部充家の笑顔を見た。底知れない顔だった。裏世界にも広く情報源を持ち、総督にも意見を述べることができる朝鮮政界黒幕の笑顔。

東亜日報は、ようやく四月一日に創刊号を出した。その直後の同月中旬から音楽会の記事を次々と掲載した。多くの人々が音楽会にやってくるようになった。音楽会は成功した。

柳宗悦は、ソンスに浅川兄弟を紹介した。

『私は、この二人を朝鮮の宝だと思っています。朝鮮が自治を獲得し独立を勝ち得て行くには文化の振興が必要です。この二人は朝鮮文化の根本を研究している者達です。兄の伯教（のりたか）は朝鮮陶磁器に対する卓越した鑑定家です。弟の巧は朝鮮の古い窯元の発掘などに努めています。』

私は、今回、朝鮮陶磁器の数々の名品を見て感動しました。これらを生み出した朝鮮民族のために美術館を建設したいと思

ます。私だけでなく、日頃より二人の活動に支援を是非にお願いしたい。』

『分かりました。これからも全面的に協力させていただきます。』

端正な顔に笑みを浮かべたソンスだった。

実はこの時、東亜日報はさらなる苦境に陥っていた。儒教界と論争を起こし、これに伴う不買運動に直面していたのだ。

数か月して、社長のパク・ヨンホは批判に耐えかねて辞任した。ソンスは急きよ東亜日報社長となった。

その直後、今度は天皇制に関わる記事が総督府警務局の怒りを買って、長期の発刊停止処分を受けた。この間、給料も欠配となった。

ソンスは立ち往生した。ジヌの四角い顔が思い浮かんだ。

三年前に妻を失ったソンスは今度再婚をする。傷が十分に癒えてはいないジヌに敢えて披露宴の招待状を送った。

上京したジヌは、披露宴が終わっても故郷

に戻ることはなかった。ソンスはジヌに東亜日報の資金繰りを託した。

二人は京城紡績と東亜日報の立て直しのため、総督府、朝鮮殖産銀行などの金融界、伊藤忠その他の商社、新聞社などを次々と回った。ハンサムな顔と厳つい顔のコンビは、京城の政財界で次第に評判となった。

一九二一年六月、総督府から一つの情報がもたらされた。日本人と朝鮮人の協力のもと、産業振興を図る産業振興調査委員会が水野政務総監を委員長として九月に発足するという。

『ソンス、これはチャンスかも知れない。おれとチャン・ドクスに委せてくれ。』

間もなく東亜日報の一大キャンペーンが始まった。

『朝鮮の産業界は、日本資本に押され非常に厳しい経営環境に立たされている。しかも日本資本によって建てられた朝鮮紡績などの会社には多額の補助金が総督府から出て

いる。こんな不合理的ことはない。地元朝鮮の資本を育てようとするならば京城紡績などにも同等に補助金が出す必要がある。』

東亜日報の主張に多くの朝鮮人が共鳴した。これにより産業振興調査委員会において同じ内容の請願が総督府に向けて行われることになった。

第一回産業振興調査委員会が開催される三日前には、電気工を装った男が倭城台の総督府庁舎に潜入し、秘書課に爆弾を投げ込む事件まで起こった。

ジヌは事前に同委員会の委員たちを訪ね、東亜日報の主張を説明した。併せて朝鮮民族資本を代弁する新聞の必要性を訴え、出資を求めた。その際、経済紙として出発したはずの朝鮮日報が左傾化しつつあり、朝鮮民族を支えるのは東亜日報だと述べた。

まもなくジヌは目標額を達成した。これを手土産に、一九二一年九月、第一回産業振興調査委員会が開催された同じ日、ジヌは東亜

日報社長に就任した。委員会にはソンスやジヌのような若輩者は出席できない。ご老公のパク・ヨンホが彼らの意見を代弁していた。

ソンスは庭を離れ、通いなれた中央学校に向かう桂洞の坂道をゆっくりと登った。

この六月、総督府は京紡に補助金を出すことを決定した。まだまだ苦しい道だが、少しは楽になりそうだ。昨年、弟のヨンス（金季洙）が京都帝国大学経済学部を卒業して京紡に入社した。ヨンスは性格が穏やかで経営も分り、むしろ私より財界に向いている。まもなく京紡を任せてもよいだろう。

ソンスは煙草に火をつけた。

柳宗悦がまた京城にやってくる。美術館開設に向けて、これまで集めた朝鮮の美術品の展覧会を行うというのだ。今回も東亜日報は大々的に宣伝を行っている。

さて、これから私はどのように進んで行こうか。

振り返ると桂洞の坂から京城市内が広がっていた。南山中腹、倭城台の総督府や日本人の街の本町、明治町あたりがぼんやりと見える。

ソンスは、柳宗悦らの存在が前より少しだけ軽くなったような気がした。